

教 仏 名 聞

第5号
(発行日)

2011年2月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○共学会—毎月6日午後7時始

○真宗入門講座—毎月18日

午後6時半始

*8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

自 死 に つ い て

仏教から見た場合、少なくとも私の聞かせていただいている仏教から見た場合「自殺は罪かどうか」を考えてみたいと思います。

【生の目的】

これを考えるとき先ず、人間を含めて生きとし生けるものは何のために生きているのかということ。それは一言で言えば、人はついには「仏になる」べく生き、またその様に生きることが願われている、そういう存在であると教えられています。

【仏と凡夫】

では仏とはどういうお方でしょうか。仏とは、はかりない智慧と慈悲を完成した絶対自由な存在(個体を超えた)といわれています。

逆に私たち凡夫は、無明煩惱(迷い)によって束縛されている苦しみの存在と説かれています。たとえば、私たちはお金に執着していますから、収入の多寡によって喜んだり悲しんだりします。それ

放棄するのだから「神のご意思に背く罪である」と教えられているようです。

【因縁所生の生】

では仏教では人間(肉体と心)はどうして生まれたのか。それは自分の過去世の業(行い)が因になり、さまざまな他の縁によって人間に生まれるたと説かれています。前の世において人間に生まれるような行為を行ってきたのを因として、過去の世が終わって、その因が両親なりのさまざま縁と結び付いて人間として生まれてきたといわれています。

生きているものは過去の業因と外縁によってさまざまに形を取り、生まれ変わり死に変わりして流れ転がってきて、今人間としての私の存在になっていると教えられています。そして迷えるものの存在の境界は大きく六つあり、天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄と説かれています。

【法を聞くに適した人間界】

そんな中で人間の境界に生まれることは難しいといわれています。他の五つの世界を

へめぐって、やっと人間界に生まれてきたのが私たちであり、人間界は仏になるといふ存在の目的を達成していくには、他の五つの境界に比べて一番適した領域であるといわれています。

それで三帰依文には「人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し。いますでに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいづれの生においてかこの身を度せん」

とあります。人間に生まれることは難しいのに、今すでに人として生まれている、それは有難いことでもあります。なぜ有難いのか。それは仏道を歩むことができやすい境界だからです。ところが人間に生まれて仏道を歩むことができにくくことも難しいのが現実です。ですから、人間に生まれてしかも仏法を聞くことができることは、これは有ること難いことであると仰せられています。

【人間は自己を問題とする】

ではなぜ人間世界は仏法を聞くのに適した境界でありましょうか。それは、人間は自

正信偈に学ぶ問答

(二十六)

一切善悪凡夫人
聞信如来弘誓願
仏言広大勝解者
是人名分陀利華

(書き下し)

一切善悪の凡夫人、如来の弘誓願を聞信すれば、仏は広大勝解の者と言えり。この人を分陀利華と名づく。

(現代語訳)

善人も悪人も、どのような凡夫であつても、阿弥陀仏の本願を信じれば、仏はこの人をすぐれた智慧を得たものであるとたたえ、汚れない白い蓮の花のような人とおほめになる。

*

G 「ここで本願を(聞信すれば)といわれるのはどうしてですか」

D 「(聞信)という言葉は、真宗の信心の特徴をよく表していると思えます。聞即信といわれ、阿弥陀仏の仰せを聞くままが信心であり、聞こ

罪(宗教的な)と言ひ得ます。しかし、自殺をせずにとれだけ長生きをしても存在の本来の願いを無視し、空しく生きるなら同じ罪があると言えましょう。

【同苦しもう阿弥陀仏】

ただ非常に大事なことは、一切の生きとし生けるものを一人子の如くに大悲したもう阿弥陀仏は、自殺をしなればならないほど苦しんだ人、苦しんでいる人の苦しみに同苦し、共感し、哀れみたまひ、悲しみたまひ、どこまでも寄り添って下さって、救いへと導いて下さっていること、そのことに私たちはよくよく思いを致さねばならないと思ひます。阿弥陀仏は生けるものにも死せるものにもわけへだてなく、喚びかけ、働きかけて下さいます。

私たちは、自殺をせざるをえなかつた人たちの苦しみに思いを寄せ、後の世においてかれらが阿弥陀仏の救いにあることを願わざるをえません。いや、もう先に救われて浄土に生まれて仏になつておられるかもしれませんが。

(了)

分自身を問題にすることができ存在だからではないでしょうか。人間は「私はどこからきたものであり、私は何であり、私はどこへいくのか」というような存在の根本問題を問うことができます。あるいは自分を反省して、生存していることの苦しみや悪を知つて、それを離れたいと願ひ得る存在です。

もし仮に、イヌやネコなどの畜生に生まれたら、はたして自分自身を問題にしたり、自分の食欲や怒りを悲しみ、生きていくことの意味を問うなどということがあつたでしょうか。

地獄の衆生はあまりにも苦しみが大きくて自分を問うようなゆとりが無い境遇といわれていますし、天上界(神々の世界)はあまりにも楽すぎ、楽にほだされて自分を省みることが乏しい境遇といわれています。それに比べて苦楽半ばし、自分を批判し自分の人生を省みる縁が多い人間界は、仏法を聞くのに適した境遇だといわれています。

【自死は望ましくない行為】

ですからせっかく人間に生まれながら、仏法にあわない

ばかりか、自らのいのちを自らによつて断つのは「好ましくないこと、望ましくないこと、痛ましいこと、残念なこと」であるといえましょう。たまたま人間に生まれたのだから、人生は苦しくても、苦しみを縁として存在の本来の意味を見出し、本当の幸せを実現すべく生きて欲しいと、自己存在の根源から願ひられているのではないのでしょうか。

【存在からの願いに生きよ】

なお「自殺も他殺もいのちを殺す殺生であるから罪だ」ともいわれたりします。しかし他殺は、死を願わない他者に非常に大きな苦しみを直接与えるという意味で大罪です。から、自殺とは質が違います。

ただ自殺は存在の根本の願いに応えることなく生きるのを途中で断つという意味では

えていることが信心のすがたであるという、そういうことを表している言葉です」
G 「どこで阿弥陀仏の仰せを聞くのですか」
D 「一番具体的には、ナムアミダブツとお念仏を称える、その声に聞くのです」
G 「どう聞くのですか」
D 「阿弥陀仏が(汝を助ける、引き受ける、必ず浄土へ生まれさせる)という大悲の誓いをお聞かせいただくのです」
G 「それが信心ですか」
D 「ええ、仰せを聞いているまま、そこに広大な大悲の信心を感じしている、それが信心のすがたです」
G 「では感知していないときは信心はないのですか」
D 「いいえ、一度、阿弥陀仏の大悲に触れると、不思議にも大悲の心が私の心に届いて離れなくなるのです。そうすると、日ごろは忘れていても、ふいふいと大悲の心をそのつど聞かされてその感知が反復されていくのです」

G 「本願を聞信する人をなぜ
広大な勝解の人と讃えられる
のですか」

D 「信心の中身である仏心に
は真実の智慧の徳がありま
す。ですから信心を得た人は
仏の智慧を得た人です」

G 「信心の人は仏の勝れた智
慧を得た人だと讃えられるの
ですね」

D 「ええそうです。私たちの
人生が信心によって救われる
のはこの智慧の働きによるか
らです」

G 「なぜこの智慧が人生を救
うのですか」

D 「智慧はものごとを道理に
そって見る心の眼です。人生
に起こってくる様々な出来事
に対して、これをどう認識し、
どのように受け取るか。そこ
に働いて下さるのが信心の智
慧です。それによって、障り
多き人生において、障りなき
道を歩ませていただけるので
す」

G 「具体的には智慧はどう働
くのでしょうか」

D 「信心をいただければ、たと
えば「人生は生まれて死ぬだ
け」としか考えていなかった
のが、死ぬのではなく浄らか
で安らかな浄土に生まれさせ

ていただくのであると素直に
受けとらせていただけるので
す。そこに一番イヤな死の壁
が越えられていくのです」

G 「他には」

D 「健康が第一に大事だと思
っていたのが、健康よりも大
事なものが与えられます。健
康も大事だけど、この宝も必
ず壊れてしまいます。信心の
智慧は、それ以上に大事な、
決して壊れない宝である仏の
いのちに摂めとられてい
とが分かります。健康だけで
は安心はありません」

G 「他には」

D 「財産や知能の良し悪しや
才能や学歴や地位や身分や職
業などの差異にこだわり、ま
た他者をそういう基準で見、
差別しがちな私たちが、そう
いう差異は相対的な違いであ
って、人は平等な真実との関
わりになかにおかれているこ
と、いわゆる阿弥陀仏に平等
につながれている存在であつ
て、それが一番大事なことで
知らされるので、差異や差別
を超えた立場で人を見る視野
が開けてきます」

G 「他には」

D 「信心の智慧は大悲の智慧
であつて、その仏の大悲心を
いただくことよって人生に大

きな満足が与えられますか
ら、人生の基本が明るくなり
人に対する憎しみや恨みの感
情が減っていく、あるいは無
くなっていくという安らかさ
があります。そして人に対し
て自ずから善意で接するよう
になつてきます。これは非常
に有難いことです」

G 「他には」

D 「どんなに親しい人とい
ても、心の底は孤独であつたの
に、信心の智慧をいただく
いつも阿弥陀仏との交わり
の中で生きていますから、孤独
がなくなります」

G 「他には」

D 「信心の智慧は自分の心を
照らし、自らの煩惱が照らし
出されてきて、慚愧の心が起
こつてまいります。ですから
煩惱の心たえず起こります
が、煩惱を照らし出してくだ
さる智慧によつて、おはずか
しいという慚愧の心が起こり
煩惱的な行いにブレーキがか
けられていくのです。このよ
うにざっと見ただけでも信心
は大きな勝れた智慧である
と思ひます。そしてこの智慧
こそ死して仏になる正しき因
であるといわれています」

G 「信心の人はそのような尊

い智慧をいただいた人だから
広大な勝解の人であると積尊は
讃えられたのでしょうか」

D 「そのように伺います」

G 「では信心をいただいた人
はこのような功德を身につけ
た人になるのでしょうか」

D 「信心をいただいたからと
いつて、現実にそういう徳が
すぐに実現するとはいえない
とは思いますが、そういう方
向に向けられ、そういう功德
が実現していくことに定まつ
たと言えましよう。その完成
体が仏になるといふこと
です」

G 「そういう人をまた「人中
の分陀利華」と積尊はほめて
おられるのですね。分陀利華
とは」

D 「白蓮華のことで、信心の
人を泥田に咲いた清らかな白
い蓮のような人であると積尊
は讃えられるのです」

G 「泥田とは」

D 「私たちの煩惱一杯の心の
たとえです。この泥田には白
い蓮など咲く種は全然ないの
に、不思議にも煩惱の心に仏
の心が届いて働いて下さる。
それを泥の中に咲いた清らか
な白い蓮にたとえられたので
ありましよう」

G 「不思議ですね」

D 「信心の不可思議な働きに
よつてなのですね。泥田の中
にありながら泥におかされな
い清浄な蓮の花のように、煩
悩の心のまっただ中であつて
煩惱の心を離れず、煩惱に働
きたもう信心を白蓮蓮にたと
えて下さるのですね」

G 「そこで信心の人を分陀利
華とたたえられたのですね」

D 「ええ、そして又、泥田は
娑婆世界にもたとえられま
しよう。濁れる娑婆の世の中
あつて信心の人は分陀利華の
ような人である、と仰せられ
るのでありましよう。信心の
人は娑婆世界にあつて、大悲
の智慧をいただいた非常に尊
く有難い人なのだ」と讃えら
れるのですね。ですから信心の
人を妙好人（すばらしくよき
人）とも讃えられるのです」

G 「妙好人とはそういうお方
のことなのですね」

D 「ええ、実際私が出逢つた
幾人もの信心のお方は、濁れ
る世の中にあつて、小さくて
も清らかな蓮の花のような尊
く有難い方たちでしたから、
そういう意味があるのだと思
います」

信心夜話

『一蓮院談合録』より（3）

（太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カッコ内は私の所感）

諸国より寄り集まった同行が、互いに自分の胸の相談ばかりをしている。師これを悲しみ、誠めて仰せらるるには、

「地獄へ落ちたくば我が機をながめておるがよい。極楽へ参りたくば、如来様のお手元を見るがよい。如来様のお手元に目をつけると、如来様はいつも、己が助けてやると云うてござる。如来様は、お前の本性のままで助けてやろうと仰せらるる。そりやどうも受け取れませぬ、承知のできぬこととござると思ふであらうが、これが誓願の不思議と云うものじゃぞや。」

*

【真宗は始めからしまいで、一生の終わりまで、（助からぬ汝を助ける）という大悲の仰せを聞くばかりである。信心がある人も聞くばかり。信心が未だ決定しない人も、この仰せを聞くばかり。信心とはこの仰せが（こんな私のためでありましたか）と仰せを受け入れていくこと。未信とは、この仰せを聞いて

はいるが、仰せがわが身に受けとられていないこと。仰せを受け入れるといつても、これから受け入れようとこちらから意

思して受け入れることなど、到底できない。仰せの大悲心が入って下さるから自然と受け入れるようになるのである。入って下さるのはまったく本願他力によつてである。仰せがいつ入って下さるかは、本人の沙汰ではなく、本願他力のおんはからいという外はない。

かといって先の未来を待つのではない。いつでも今ある法である。今いただけの法である。今助かる法である。今ただける法をこちらがはねつけているだけである。南無阿弥陀仏は、今の私のみままで助かるように阿弥陀仏によつて完全に仕上げられている大慈大悲の法である。それを（今はまだ駄目、もっと聞法しなれば）といっているのは、今のお助けを自分ではねつけているのである。（自分は聞法すれば、まだ少しはなんとかなれる）と思っているのである。ただこの（助からぬそなたを引き受ける）との驚くべき大悲心を知り受けるのである。

南無阿弥陀仏とは、（助からぬ汝をまゐるまる助ける）との如来様の勅命の言葉である。如来の勅命を聞くのは南無阿弥陀仏の声を聞くことにおいて現実化している。如来様の仰せといつても、口に称えられ、耳に聞こえて下さる南無阿弥陀仏の名号を離れると、観念化し思想化してしまうのではなからうか。如来様は大悲の仰せを南無阿弥陀仏の御名において聞かせて下さる。それほどまでのお手立

てをして下さったのである。

この仰せを聞く一つということは如来の御名を聞く一つ。生涯、聞く一道があるばかり、単純至極である。この道でないと迷いやすい凡夫は道を外れてしま

いから助からぬ、どうか地獄一定の自分であると自覚したい、といっているのは自分の方を眺めているのである。まだ自分の心の中に、地獄一定の自覚や思いができたからお助けと思っているのである。それを種に助かるうとはからっているのである。

私たちは、自分を地獄一定と思えても思えなくても（助からぬ身である）。如来様は（助からぬ身である）という私の本性をすでに知り抜かれた上で、（そのままなりを助ける）と仰せ下さるのである。助からぬ身だからこそ、助けるというお念仏が出て下さっているのである。

南無阿弥陀仏が出て下さるのはわが身が助からぬ存在だからであり、それを目当てに（助ける）と現れて下さる如来様である

お助けの相談を自分の心にするのは、相談相手が違う。如来様に相談したら話は直ぐにつく。自分の心に相談したらいつまでたつてもラチがあかぬ。助かる相談を自分の心

にするのは阿弥陀仏の願行のご苦勞を無駄骨にしている。阿弥陀様の大願業力を軽んじているのである。

五劫の思案は誰のためであるか。永劫の御修行は誰のためであるか。お浄土は誰のためのお浄土か。南無阿弥陀仏は誰のためか。皆、我一人のためではないか。私を「そのままなりで助ける」と仰せ下さっているのに、まだ自分の胸に相談して、ああじゃこうじゃといっているすがたは、阿弥陀様からはどう見えているであろうか。「ああいつまでもむだなことをやっている、かわいそうだ」と見ておられるのではなからうか。「汝が助かる問題は我にまかせて早く楽になつてくれよ」と思っておられるのではなからうか。

地獄一定の自覚がなかったら、いよいよ阿弥陀様にまるまる引き受けていただく外はないではないか。いつもいつも「如来様はお前の本性のままに助けてやろうと仰せらるる」のである。

如来の本願は大慈大悲の広大な不思議。この不思議を理屈離れて仰ぐばかりである。だまされまい、だまされまいと用心する娑婆の根性で聞くから、いつまでも理屈を超えた大悲が届かない。宗祖は「たとい、法然聖人にすかさされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさうろう」とまでおっしゃっている。」（了）

《念佛寺永代経法要》

四月二十二日（金）午後二時始

講師 藤枝宏壽師（福井県越前市）